

---

# これからの日常

q E S t

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

これからの日常

### 【コード】

N2042E

### 【作者名】

qest

### 【あらすじ】

普通に過ごしている中学生の「吉野彼方」が、学校からの帰り道でちょっとしたことに気付く。

もう夏が近い。

強めの春風は人々を追い立てて、楽しんでいるかのようだったが、風は飽きたかのように吹かなくなっている。ついこの前まで冬だったし、ついでに俺は中学一年生だったって言うのに、いつの間にか春を迎え、それも過ぎ去ろうとしていた。

暖かな陽気が真夏の陽射しに変わりつつある。もう制服では暑さが我慢できなくなるだろう。やっぱり夏が近い、と思った。

さて、学校には掃除当番と言うものが大抵ある。それに割り当てられた人は掃除をしなければならぬ。しかし、教室の掃除当番をちゃんとこなしているのは俺と知らない女の子だけだった。俺は中学生になってから生真面目になっただけらしい。

小学生のころとかなら、学校の掃除なんてさっさと終えて、早く帰ろうとした。

あわよくばサボっていた。が、今はなぜかほうきをきちんと片手に持って、掃除をがんばっている。

何でこんなになんばってんだろう。あほらしい。でもがんばるしかない。掃除を終わらせないと帰れない。隣で机を運んでいる誰かのためにもならないだろう。

「はあ」

思わずため息が出た。

「大変だよな」

心配してくれたのか、一緒に掃除をがんばってくれている女の子が話しかけてくれた。

「そうですよね」

俺はなんで敬語使ってるんだ。

「敬語使わなくていいよー？」

「あ、ごめん、そうですよね。なんか癖で」

「あは、変な癖。直したほうがいいよ」

別に癖じゃないんだけど、癖だと言ったのは俺だ。仕方ないから直るといいけどね」とかいつておいた。

話をしながら掃除をするのは案外まんざらでもない。結局掃除は二人だけで終わる。それが逆にちよつと嬉しかった。

机を整頓してすぐ、さっきの女の子に「ありがとっ、じゃあまたね。」と言って、かばんを持って学校をでた。さっきまで掃除をしてたからか、妙に外の空気は新鮮でおいしい。

校門の前を歩きながら運動場を眺めていた。

（そつだ、本屋でも行こうか）

じゃあ本屋に行くか。

唐突におーい、彼方かなたあ、と自分の名前を呼ばれた。俺を苗字で「吉野」と呼ばないやつは俺が知っている中で3人だけだ。帰り道が同じやつなら横田だろう。その前に、声でもわかる。振り返らないであるきながら返事をした。

「何だよ、横田」

「一緒に帰らない？」

「別に良いけど。俺、本屋寄るよ」

「あ、良いよ。俺も立ち読みするし」

「また立ち読みか？そんなに野球雑誌がすき？」

「いや、別に。」

じゃあ何で読むんだよ。買えよ。あつ好きじゃないから買わないのか。

「立ち読みだけに、たちの悪い客だな。ただの冷やかかしじゃん」

「うまくないから。立ち読みするなら買わなきゃって思うけどねえ」

まあ、読み終わった雑誌をかうなんて真似は出来ないだろう。気持ちはわかる。

「読み終わった雑誌なんて買う金がもつたいなくてさ？」

でも、最初から読むな。そもそも、俺に同意を求められても困るの。

いつの間にか俺のやや前のほうをあるく、横田に言った。

「知らないけど、ブラックリストに乗るなんてことはよしてくれよ。俺まで警戒されそう。」

「いや、絶対それはないってえ」  
何で自信満々なの？

俺は最近まで気付かなかったが、こいつが本屋に来るときはいつも俺と一緒にいる。横田は自分から本を読んだりはしていないと言っている。つまり、いつも俺の暇つぶしに付き合ってくれているだけなのだろう。

そういえば、よく他愛もない会話を交わしながら二人で本屋へ向かっている。

帰り道が近いのもあるだろうが、横田は少し不真面目でも、俺と気が合うし、いつも自分より人を優先する。

そういうところが横田の良いところである。そしてそこに俺も魅かれていたのだろう。

ああ。

今まで、生まれてからの13年間、たまに友達と話して、たまに一人になって。

時には悲しくなり、怒ったりもするが、慰めてくれる人が居たり、いつもみんな支えあってきた。これが日常。幸せ。

誰にも邪魔されない俺の日常。

そうであって欲しい、と切に願っていたに違いない。

でも、近頃は……なにかこの日常は物足りない。何かが起こらないかな。そう思えてきている。

かなわない願いなのだろうか、小さな事件ひとつない。何も無い。何も起こらない。

常に何かが起こらないか期待しているのも、俺の日常になりつつある。日常を変えたい。どうすれば変わるんだろう。

「おい、俺は雑誌コーナー行ってくる」  
不意に横田の声が聞こえた。

「へあ」

なんか情けない声を出してしまった……。

「おう、本見るの飽きたら呼べよ。」

別段気にもしない様子で横田はそのまま雑誌が適当につんである、店の隅のほうに歩いていった。

いつの間にか本屋にいたってわけじゃない。確かに本屋までの道を横田と一緒に歩いてきた。

けど、俺は本屋に来てどうするつもりだったんだ？何か買いたい本でもあったつけ。

多分、理由なんて無いのに自然と本屋に足を向けたのだろう。本屋に來ると、いつもこうなる。

そして面白そうな本を探すしかすることは無い。

(小説でも探すか)

何の気もなしに文庫本が並んでいる本棚へ目を向けた。

『猫の町』

今流行の本とか、有名な賞を受賞した本とかが大量に並べられている棚にシンプルな表紙が逆に目立つ本が一冊だけあった。

今日はもうこの本で良いや。

今日この本を買わないと後悔するかもしれない。そんな予感がした。なんとなく。映画化されたりしてちやほやされてる様な小説より、もはや多くの人には買われず、端に寄せられている様な、隠れた名作が好きだ。

もちろん名作なんて滅多に出会えないけど。

すぐに『猫の町』を手にとって、内容を確かめないでそのままレジへ向かった。

雑誌コーナーで野球雑誌を読みながら、暇そうにしている横田が見えた。

(すまん、横田)

『猫の町』は文庫本なので大きさはふつうだが、結構分厚い本だ。これならしばらくあいつを付き合わせることはないだろう。

本を買い終え、横田に話しかけた。

「おい、横田」

「は？もういいのか？」

「うん、もう決めた」

「いつもより速いじゃん。何買った？」

「猫の町。」

「著者は？」

「えっと、穴沢 孝？」

「聞いたことないな。お前いつも俺が知らない本買うよね」

「いいじゃん、未知で。」

何がこの本に書いてあるのか、この本を通して作者が伝えたいことは何なのか。未知だからおもしろい。

とか思っけていてもやっぱり内容がつまらなかったら落ち込むけど。

「帰ろうか」

俺が帰ろうとしたら、

「あっちよと待った」

待てと言われた。

「どうした？」

「これ買うわ」

横田の手には俺と本屋に来る時、いつも読んでいる野球雑誌。

「珍しいな」

「お前、いつもより速かったからさ、読み終わってねえ」

そういうことか。最初から買えよ。俺のせいだけだ。

横田が本屋の袋を持って帰ってきた。ほんとに買ってきたんだな。俺達はそれぞれ買った本を鞆に仕舞い、なんとなく急いで歩きだす。

本屋の外は暑かった。

黙々と歩く俺たち。でも、お互いが何を考えているかは少しはわかるような気がする。

もう横田との別れ道が目の前にある。それぞれの思う道は違う。

「じゃあな」

俺のほうから別れを言った。

「おう」

返事が返ってきたほうに手をふった。

日常が変わってほしい。けど、その前に俺が変わらなければ。良い考えだ。

でも、俺はどういう風に変われれば良いんだろう。

答えは案外すぐに出た。

「あっちい」

手で自分を仰ぎながら、学校の女の子を思い出そうとした。

そういえばあんまり顔も覚えてない。明日は名前でも聞いとこうかな。

心が穏やかだ。

(後書き)

初めて小説を書きました。アドバイスや感想をいただけると幸いです。

ご指摘を頂いたので、身近にあった本を参考にして段落などをつけました。誤字等が残っていたらお知らせください。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2042e/>

---

これからの日常

2009年3月24日09時36分発行